

高等讀本

山縣悌三郎編纂

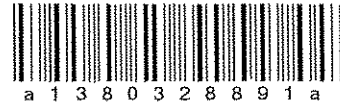
四

T1A3

10

Y 22

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 8 8 9 1 a

福岡教育大学蔵書

高等讀本卷之四

目次

第一課	軍人への勅諭	其一	丁
第二課	軍人への勅諭	其二	一
第三課	軍人への勅諭	其三	二
第四課	谷村計助		三
第五課	塾規	佐藤一齋	四
第六課	名家の手簡	林鶴齋	五
第七課	世界周遊	其一	六

高等讀本

卷之四

目次

丁

山縣悌三郎編纂

高等讀本

明治三十七年四月十日  
文部省検定済學校教科用書

文學社

第八課 朝鮮征伐 其一

十六

第九課 朝鮮征伐 其二

十八

第十課 朝鮮征伐 其三

二十

第十一課 農事 其一 宮崎安貞

二十二

第十二課 農事 其二 宮崎安貞

二十四

第十三課 老成の言は侮るべからず 荒井堯民

二十六

第十四課 青木昆陽

二十七

第十五課 世界周遊 其一

二十九

第十六課 財を用ふる法 貝原篤信

三十一

第十七課 金ヲ借ルコトノ危キ

事 中村正直

三十二

第十八課 世界周遊 其三

三十四

第十九課 馬盗人

三十六

第二十課 自暴自棄 伊勢貞丈

三十九

第二十一課 世界周遊 其四

四十

第二十二課 珊瑚の話 其一

四十一

第二十三課 珊瑚の話 其二

四十三

第二十四課 世界周遊 其五

三十八

第二十五課 鐵ノ種類

五十二

第廿六課

觀世太夫の傳

畑 鶴山

五十三

第廿七課

世界周遊

其六

五十四

第廿八課

忍耐

五十六

第廿九課

應舉が臥猪并野馬の話

瀧澤馬琴

五十七

第三十課

締盟國

五十九

## 高等讀本卷之四

### 第一課 軍人への勅諭 其一

我が國の軍隊は、世天皇の統率し給ふ所にぞある。昔神武天皇躬から大伴物部の兵どもを率ゐ、中國のまつろはぬものどもを討ち平げ給ひ、高御座に即かせられて天下ろろめ給ひ、より二千五百有餘年を経ぬ。此間世の様の移り換るに隨ひて、兵制も沿革も亦屢なりき。古は天皇躬から軍隊を率ゐ給ふ御制にて、時ありては、

高 等 學 校 本 第 一 卷 第 一 章 第 一 節  
皇后、皇太子の代らせ給ふこともありつれど、大凡そ兵權を臣下に委ね給ふことはなかりき。中世に至りて、文武の制度、皆唐國風に倣はせ給ひ、六衛府を置き、左右馬寮を建て、防人など設けられしかば、兵制は整ひたれども、打續ける昇平に狃れて、朝廷の政務も漸く文弱に流れければ、兵農れのづから二つに分れ、古の徵兵は、いつとなく壯兵の姿に變り、遂に武士となり、兵馬の權は、一向に其武士どもの棟梁たる者に歸し、世の亂と共に政治の大權も亦其手に落ち、凡そ七百年

の間、武家の政治となりぬ。世の様の移り換りて、斯くなれるは、人力もて挽回すべきにあらずどはいひながら、且は我が國體に戻り、且は我が祖宗の御制に背き奉り、淺間くき次第なりき。降りて弘化、嘉永の頃より、徳川の幕府其政衰へ、剩へ外國の事ども起りて、其侮をも受けぬべき勢に迫りければ、朕が皇祖仁孝天皇、皇考孝明天皇、いたく宸襟を惱まゝ給ひしころ、忝くも又惶けられ、然るに朕幼くして天津日嗣を受けし初め、征夷大將軍其政權を返上し、大名小名其版籍を奉還

高等國本 卷之四  
し年を経ずして海内一統の世となり、古の制度に復しぬ。是れ文武の忠臣良將ありて、朕を輔翼せる功績なり。歷世祖宗の専ら蒼生を憐み給ひし御遺澤なりといへども、併し我が臣民の其心に順逆の理を辨へ、大義の重きを知れるが故にこそあれ。されば此時に於て兵制を更め、我が國の光を耀かさんと思ひ、此十五年が程に陸海軍の制をば今の様に建て定めぬ。夫れ兵馬の大權は、朕が続ぶる所なれば、其司々をこそ臣下には任ずるなれ。其大綱は、朕親ら之を攬り、肯て臣下

に委ぬべきものにあらず。子々孫々に至るまで、篤く斯旨を傳へ、天子は文武の大權を掌握するの義を存して、再び中世以降の如き失體なからんことを望むなり。

朕は汝等軍人の大元帥なるぞ。されば朕は汝等を股肱と頼み、汝等は朕を頭首と仰ぎて、其親は特に深かるべき。朕が國家を保護して、上天の恵に應じ、祖宗の恩に報い、まゐらすることを得るも得ざるも、汝等軍人が其職を盡すと盡さばるとに由るぞか。我が國の稜威振はさるこ

高等 國本 卷六 三十一  
とあらば、汝等能く朕と其憂を共にせよ。我が武  
維れ揚がりて、其榮を耀かさば、朕汝等と其譽を  
偕にすべし。汝等皆其職を守り、朕と一心になり  
て、力を國家の保護に盡さば、我が國の蒼生は永  
く太平の福を受け、我が國の威烈は大に世界の  
光華ともなりぬべし。朕斯くも深く汝等軍人に  
望むなれば、猶訓諭すべき事こそあれ。いでや之  
を左に述べむ。

第二課 軍人への勅諭

其二

一 軍人は、忠節を盡すを本分とすべし。凡そ生  
を我が國に稟くるもの、誰かは國に報ゆるの心  
なかるべき。況して軍人たらん者は、此心の固か  
らでは、物の用に立ち得べしとも思はれず。軍人  
にして報國の心堅固ならざるは、如何程技藝に  
熟し學術に長ずるも、猶偶人にひとしかるべし。  
其隊伍も整ひ節制も正しくとも、忠節を存せざ  
る軍隊は、事に臨みて烏合の衆に同しかるべし。  
抑國家を保護し、國權を維持するは、兵力に在れ  
ば、兵力の消長は、是れ國運の盛衰なることを辨

へ世論に惑はず政治に拘はらず只一途に己が本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ其操を破りて不覺を取り汚名を受くるなかれ。

一軍人は禮義を正しくすべし。凡そ軍人には上元帥より下一卒に至るまで其間に官職の階級ありて統屬するのみならず同列同級とても停年に新舊あれば新任の者は舊任のものに服従すべきものぞ。下級のものは上官の命を承くること實は直に朕が命を承くる義なりと心得

よ。己が隸屬する所にあらずとも上級の者は勿論停年の己より舊きものに對しては總て敬禮を盡すべし。又上級の者は下級のものに向ひ聊かも輕侮驕傲の振舞あるべからず。公務の爲に威嚴を主とする時は格別なれども其外は務めて懇に取扱ひ慈愛を專一と心掛け上下一致して王事に勤勞せよ。若し軍人たるものにして禮儀を素り上を敬はず下を惠まずして一致の和諧を失ひたらんには實に軍隊の蠱毒たるのみかは國家の爲にもゆるし難き罪人なるべし。

高等 國本 第五  
一軍人は武勇を尙ふべし。夫れ武勇は我が國にては古よりいとも貴べる所なれば我が國の臣民たらんもの武勇なくては叶ふまじ。況して軍人は戰に臨み敵にあたるの職なれば片時も武勇を忘れてよかるべきか。さはあれ武勇には大勇あり小勇ありて同じからず。血氣にはやり粗暴の振舞などせんは武勇とは謂ひ難し。軍人たらんものは常に能く義理を辨へ能く膽力を練り思慮を殫して事を謀るべし。小敵たりとも侮らず大敵たりとも懼れず己が武職を盡さむ

こそ誠の大勇にはあれ。されば此勇を尙ふものは常々人に接するには溫和を第一とし諸人の愛敬を得むと心掛けよ。由なき勇を好みて猛威を振ひたれば果ては世人も忌み嫌ひて豺狼などの如く思ひなむ。心すべきことにこそ。

第三課 軍人への勅諭 其三

一軍人は信義を重んずべし。凡そ信義を守ること常の道みはあれどゐきて軍人は信義なくしては一日も隊伍の中に交りてあらんこと難か

るべし。信とは己が言を踐み行ひ義とは己が分を盡すをいふなり。されば信義を盡さむと思はゞ始より其事の成し得べきか得べからざるかを審に思考すべし。臆氣なる事を假初に諾ひてよしなき關係を結び後に至りて信義を立てんとすれば進退谷まりて身の措き所も苦むことあり悔ゆとも其詮なし。初めに能々事の順逆を辨へ理非を考へ其言は所詮踐むべからずと知り其義はとて守るべからずと悟りなば速に止むるこそよけれ。古より或は小節の信義を立てんとて大綱の順逆を誤り或は公道の理非に踏み迷ひて私情の信義を守りあたは英雄豪傑どもが禍に遭ひ身を滅ぼし屍の上の汚名を後世まで遺せること其例尠からぬものを深く警めてやはあるべき。

一軍人は質素を旨とすべし。凡そ質素を旨とせざれば文弱に流れ輕薄に趨り驕奢華麗の風を好み遂には貪汚に陥りて志も無下に賤くなり節操も武勇も其甲斐なく世人に爪はくさせらるゝ迄に至りぬべし。其身生涯の不幸なりと

いふも中々愚なり。此風一たび軍人の間に起りては、彼の傳染病の如く蔓延し、士風も兵氣も順に衰へぬべきこと明かなり。朕深く之を懼れて、曩に免黜條例を施行し、略此事を誠め置きつれど、猶も其惡習の出でんことを憂ひて、心安からねば、故らに又之を訓ふるすかし。汝等軍人、ゆめ此訓誡を等閑にな思ひぞ。

右の五ヶ條は、軍人たらんもの暫くも忽にすべからず、さて之を行はんには、一の誠心こそ大切なれ。抑此五ヶ條は、我が軍人の精神に、一

の誠心は、又五ヶ條の精神なり。心誠ならざれば、如何なる嘉言も、善行も、皆うはべの裝飾にて、何の用にかは立つべき。心だに誠あれば、何事も成るものすかし。況してや五ヶ條は、天地の公道、人倫の常經なり、行ひ易く守り易し。汝等軍人、能く朕が訓に遵ひて、此道を守り行ひ、國に報ゆるの務を盡さば、日本國の蒼生、舉りて之を悦びなん。朕一人の懌びのみならんや。

## 第四課 谷村計助

高等讀本 八  
谷村計助ハ日向國諸縣郡倉岡ノ士族ニシテ、  
父ヲ阪本利右衛門トイフ。後出デ、谷村ノ家ヲ  
繼ギ明治五年熊本鎮臺ノ歩卒トナル。七年二月、  
佐賀ノ亂起ルヤ熊本鎮臺兵ヲ發シテ之ヲ伐ツ。  
計助大尉和田勇馬ニ從ヒ海路ヨリ佐賀城ニ入  
ル。賊兵遽ニ來リ攻メ銃砲交々發ス。已ニシテ城  
中糧盡キ彈藥亦乏シクソノ勢支フベカラズ。乃  
チ圍ヲ潰シ賊軍ヲ衝カントス。時ニ計助中軍ニ  
屬シ門ヲ開キテ突進ス。賊四面ヨリ夾撃ス。官軍  
殊死シテ戰ヒ遂ニ一方ヲ破ル。時ニ我が軍伍大

ニ亂レシカバ分チテ三隊トナス。計助大尉奥保  
鞏ニ屬シ且戰ヒ且走リテ細取村ニ至ル。小川ア  
リ賊前後ヨリ夾ミ攻ム。計助身ヲ挺デ奮闘シ  
河ヲ涉リテ江見村ニ至ル。是ニ於テ計助諸軍ノ  
嚮導ヲ爲サンコトヲ誓ヒ乃チ單身前行ス。衆皆  
之ニ尾シ河津ニ達スレバ計助既ニ船ヲ艤シテ  
待ツ。諸軍急ニ渡ル。賊軍追ヒ至レドモ船ノ渡ル  
ベキモノナシ我が兵遂ニ陸兵ニ會スルコトヲ  
得タリ。此役ヤ計助ナカリセバ一部ノ衆或ハ河  
上ノ鬼ト爲リシモ未ダ知ルベカラズ。已ニシテ

官軍ノ援兵來リ、諸道並ビ進ミテ、佐賀城ヲ陷ル。計助戰フ、毎ニ人皆其膽勇ヲ稱セリ。

幾バクモナクシテ、計助伍長ニ進ミ、臺灣ノ役ニ從フ。九年、神風黨ノ熊本鎮臺ヲ襲フヤ、聯隊長乃木希典、計助ヲ率ヰテ自ラ隨フ。蓋シ計助ノ倚ルベキヲ以テナリ。計助既ニ熊本ニ至リ、將ニ小倉ニ赴キテ、臺下ノ形勢ヲ報ゼントス。偶、山口秋月ノ亂人并ビ起リ、諸驛騷擾ス。乃チ計助ヲシテ探偵セシム。計助形ヲ變ジテ車夫ト爲リ、諸方ノ動靜ヲ視フニ、異狀ナキヲ以テ小倉ニ歸レリ。十

年、西郷隆盛反シテ熊本城ヲ圍ム。城將谷干城、守城ノ方略ヲ征討軍ニ報ゼントス。城中未ダ其人ヲ得ズ。聯隊長川上操六、衆ト議シ、計助ヲ舉ゲテ密ニ其意ヲ諭ス。計助之ヲ諾シ、聯隊長ト俱ニ來リテ命ヲ乞フ。干城乃チ教令ヲ授ク。計助退キテ煤煙ヲ全身ニ塗ル。黑質自然ノ如シ。因リテ檻樓ヲ著ケ、笑ヒテ曰ク、以テ賊輩ヲ欺クベシト。夜ニ乘ジテ城ヲ出デ、南關ニ赴カントス。賊ノ爲ニ縛セラル。計助百方解陳スレドモ聽カレズ。乃チ守卒ノ眠ルヲ伺ヒ、爪ヲ以テ繩ヲ絶チ、逃レテ潛行



合計將總ヲモテテ旅團本部ニ送ル

ス。吉次山中ヲ過グル  
ニ及ビ再ビ捕ヘラル。  
計助伴リテ懦夫ノ狀  
ヲ爲シ、股栗垂泣眞ノ  
如シ。賊之ヲ憫ミ縛ヲ  
釋キテ擔夫トナス。計  
助復タ間ヲ得テ逃レ  
遂ニ第一旅團ニ達ス。  
初メ計助ノ縛ニ就  
クヤ、痛ク拷掠セラレ

飲食ヲ絶ツコト屢ナリ。其征討軍ニ達スルニ及  
ビ哨兵ニ告グルニ實ヲ以テス。然レドモ顔色常  
ナラザルヲ以テ信ゼラレズ、遂ニ縛セラレテ本  
營ニ至ル。旅團長野津少將、計助ヲ召シ見ル。計助  
歔歔シテ言フコト能ハズ。既ニシテ徐ニ命ヲ陳  
ベ、且ツ狀ヲ説ク。其言語悲壯慷慨、聽ク者皆感歎  
ス。少將厚ク之ヲ遇シ、營ニ就キテ休止セシム。官  
軍田原坂ヲ攻ムルニ及ビ、計助戰隊ニ列セシコ  
トヲ請フ、許サズ。固ク請ヒテ已マズ。乃チ命ズル  
ニ傳令ノ事ヲ以テス。偶官軍利アラズ。計助之ヲ

見テ怒氣勃然トシテ抑フルコト能ハズ。蹶起シテ他人ノ銃ヲ奪ヒ、單身叱咤シテ突入シ、遂ニ丸ニ中リテ斃ル。時ニ年二十五ナリ。訃音至ルニ及ビテ、舉軍歎惜セザル者ナカリキ。

計助人ト爲リ、忠實寡言、上官ニ事フルコト恭敬ナリ。故ニ能ク使命ヲ達シ、終ニ奮戦シテ命ヲ殞ス。實ニ軍人ノ龜鑑トイフベシ。後同志相謀リテ、碑ヲ靖國神社ノ境内ニ建テ、忠烈ヲ不朽ニ傳フ。陸軍大將二品有栖川熾仁親王、篆額ニ題シテ、『軍人龜鑑之碑』

トイフ。其文ハ谷干城ノ撰スル所ナリ。此事忝クモ聖聽ニ達シ、勅シテ其忠烈ヲ表シ、金若干ヲ賜フ。

#### 第五課 塾規

#### 立志

諸友學問心掛けられ候趣意は、第一倫理を辨へ、君子に成るべきためにて候。こゝに志なき輩は、假令萬卷の書を讀破候ても、學問心掛け候とは申がたく候。況して倫理は大學問うか

高等讀本 卷之四 十二 學 一  
と出來候義決して無之候。此志さへ立ち候へば書籍讀み候事も此志の内にこれあり候。誠に入學第一の義にてかりるめに思はれ間敷候事。

### 勵行

學者日用の間逢ふ所朝晝暮夜行を離れ候事これなく候。兎につき角につき能く誠實に心を盡し輕薄浮躁の態なき様に心掛けらるべき事に候。朋友會合の際は言語の上緊要にて候。朋友も互に益を求め仁を輔くるた

めなり。然るを無益の雜話に時を費さば益なくして損あるべし。雜話の上より自然と不遜にもなり争端を起す事にも及び候。か様の義一切これなき様に心掛けらるべく候。且少者は長者を敬し長者は少者を愛すべし。假令少者たりとも業の勝れたるものは業の先輩なれば不敬なきやうに相談あるべし。先輩たる者も其長を挾み後進を輕侮すればやはり長者の德なきゆゑに後輩にかはる事これある間敷候。大抵朋友の義は兄弟に等し其親愛の

心より切瑳あるべく候事。

游藝

文字の事は、經說たりとも藝に屬すべし。學問中の一事にて候。嚴に課程を立て、其間に優游涵泳すべき事尤も候。もし實行なくして、讀書作文のみに流れ候ては、何程經說に委く、諸子百家に涉り、詩文を巧に致し候ても、技藝にはる事これなく候。書籍を離れ候ては、其餘常人に等しかるべし。却て世人より譏を招く事數多これあり候。然れば實行ありての讀書に

て候。

凡そ先輩に疑を質す、生きたる書を讀むに同じ。書を讀む事は、死たる先輩より訓を受くるなり。されば經義を講明するに當りては、先輩老人に對し、まの當り質義する心に成り。己を虚し、其語を身に引當て、沈潜すべし。輕卒躁妄なるべからず。能くかくの如くなれば、讀書も亦即實行の一にて候以上。

三條の約諸友ともに確守いたすべく候。背馳これなきやうに心かけられ尤に候事。

寛政十一年己未年九月

佐藤一齋……俗簡焚餘

第六課 名家の手簡

林 鶴梁

岡田鴨里に寄す

一書拜呈諸御宿疾如何被為懷哉我亦業事中  
上候若一病間もいへり別紙拙文昨今火急  
催促受け當惑に付御憐察を乞ふ法痛正奉希度  
も。不用立候はゞ別紙題辭了認遣裁とも奉

存せしお成是迄長く引留置候も付文の方に  
仕度右願用迄急々草す不

第七課 世界周遊 其一

地球上ニハ五個ノ大陸アリ。亞細亞洲歐羅巴  
洲亞弗利加洲亞米利加洲及ビ阿西亞尼亞洲是  
ナリ。我ガ日本ハ亞細亞洲ノ東邊ニ位スル一島  
國ニテ誠ニ滄海ノ一粟ニ過ギズ。其東南ニハ渺  
茫タル太平洋アリ、北ニハ北極海アリ、西北  
ナルハ日本海ニテ、西南ヲ環繞スルハ支那海ナ

高等讀本 卷之四 十五  
 リ。對岸ノ國々ニハ、朝鮮、支那、及ビ魯西亞領ノ樺太、かむちや、かアリ。朝鮮、樺太、及ビかむちや、かハ我ガ境土ヲ距ルコト四里乃至數十里ニ過ギズ。朝鮮ハ、古ヘ馬韓、辰韓、弁韓ノ故地ナルヲ以テ、三韓ノ稱アリ。後新羅、百濟、高麗、任那ノ諸國ニ分ル。新羅、百濟、高麗ハ、神功皇后ノ之ヲ征服シ給ヒシヨリ、永ク入貢シテ外蕃ト稱シ、漢學、佛教、及ビ諸種ノ技藝ヲ傳ヘシコトハ、歷史上ニ明ナリ、任那ハ、早ク崇神天皇ノ朝ヨリ朝貢セリ、朝鮮ハ、國內未ダ開ケザルヲ以テ、交通貿易ノ



朝鮮ノ風俗

業甚ダ盛ナラズ、僅ニ釜山浦、元山津、仁川ノ三港ヲ開キテ、外國互市場トスルノミ。三港共ニ我ガ居留地ヲ設ク。殊ニ釜山浦ハ、我ガ國ニ渡航スル要津ナレバ、神功皇后ノ三韓征伐ヨリ、豐太閤ノ朝鮮征伐ニ至ルマデ、皆

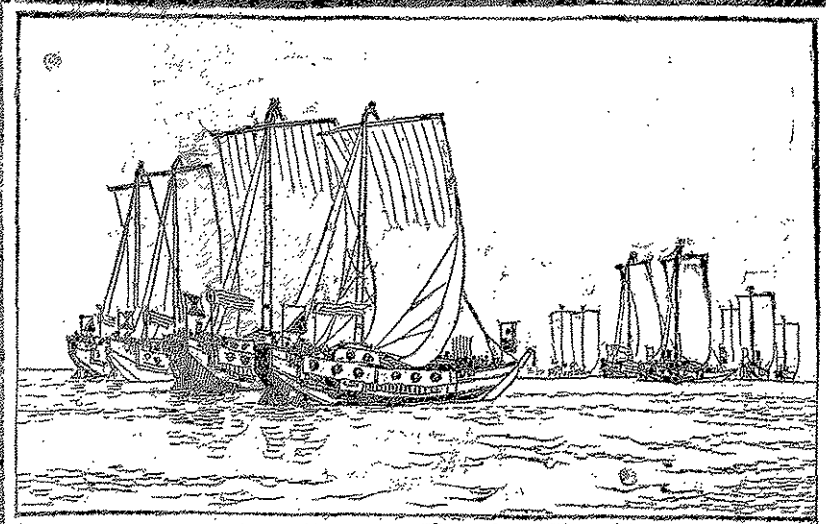
上陸スルニ此地ヲ用ヒザルハ無シ。

第八課 朝鮮征伐 其一

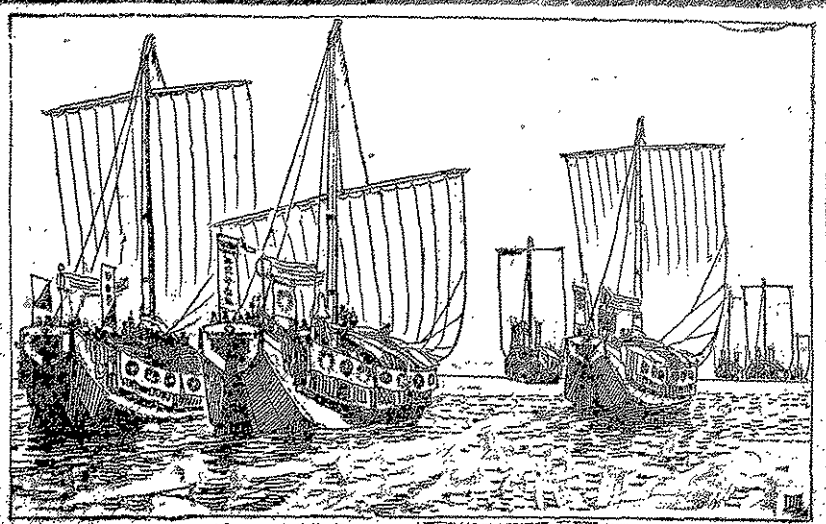
豊臣秀吉匹夫ヨリ起リ遂ニ能ク海内ヲ統一シ天下ノ政權ヲ掌握ス。而シテ心ニ自ラ足レリトセズ竊ニ朝鮮明國ヲ併吞セント欲スルノ志アリ。乃チ明國久シク聘問ヲ絶チ朝鮮亦來貢セザルヲ以テ先ヅ其修好ヲ促シ聽カザレバ事ニ從ハントス。因テ先ヅ使ヲ朝鮮ニ遣ハシ諭シテ曰ク「吾明國ト舊好ヲ修メント欲ス貴國爲ニ之

ヲ介セヨ」ト。朝鮮狐疑シテ應ゼズ。尋デ對馬守宗義智ヲ遣ハシ釜山ノ邊將ニ諭サシメテ曰ク「秀吉將ニ大兵ヲ發シテ明ヲ攻メントス。貴國ノ邊海亦必ズ騷擾セン。唯貴國速ニ明ト絶チ信ヲ我ニ通ゼバ此患ヲ免レン」ト。邊將之ヲ國王ニ奏ス。國王信ゼズ。義智要領ヲ得ズシテ空シク歸リ備ニ朝鮮ノ事情ヲ説キ且ツ其地圖ヲ獻ズ。

是ニ於テ秀吉意ヲ決シ諸將ヲ會シテ議ス。聲色俱ニ厲シ諸將愕然敢テ答フル者ナシ。浮田秀家其忤フベカラザルヲ知リ進ミテ曰ク「殿下此



大事ヲ舉グ誰カ努力セザ  
ランヤ」ト。議乃チ決ス。秀吉  
大ニ悦ビ自ラ兵ヲ率井テ  
明國ニ赴カントス。其母大  
ニ憂慮シ寢食ヲ廢スルニ  
至ルヲ以テ浮田秀家ヲシ  
テ代リ往カシメ軍營ヲ肥  
前ノ名護屋ニ造リ自ラ出  
デ、之ニ居ル。時ニ文祿元  
年二月ナリ。



秀吉將ニ京師ヲ發セン  
トスルニ臨ミ或ル人謂テ  
曰ク「蓋ゾ漢文ヲ善クスル  
者ヲ從ヘザル」ト。秀吉笑ヒ  
テ曰ク「吾此行將ニ彼ヲシ  
テ我が文ヲ用ヒシメント  
スルノミ」ト。已ニシテ名護  
屋ニ至ル。西南四道ノ兵二  
十萬人ヲ分チテ水陸九軍  
ト爲シ八軍ヲシテ朝鮮ノ

八道ニ向ハシム。浮田秀家ヲ元帥トナシ、加藤清正、小西行長ヲ先鋒ニ、九鬼嘉隆、加藤嘉明ヲ水軍ノ將トス。諸軍閔シテ帆ヲ揚グ、舳艫相啣ミ進ミテ朝鮮ニ入ル。

第九課 朝鮮征伐 其二

行長先ヅ釜山浦ニ上陸シ、守將鄭撥ヲ斬リ、東萊ヲ拔キ、漢城ヲ陷ル。韓王李昭出デ、平壤ニ奔ル。清正ハ行長ニ後ル、コト三日ニシテ釜山浦ニ至ル。行長既ニ進ムト聞キ、轉ジテ別路ヨリ咸

鏡道ニ入り、韓ノ二王子ヲ擒ニス。諸將相繼ギテ進ム。轉戰皆捷チ、殆ド無人ノ境ヲ行クガ如シ。李昭使ヲ馳セテ援ヲ明ニ乞フ。

七月、明主李如松、祖承訓、史儒算ヲ將トシ、精兵五千ヲ率ヰテ來リ援ケシム。承訓人ニ問ヒテ曰ク、「平壤ノ和兵已ニ退クヤ否。」曰ク、「未ダシ。」承訓酒ヲ舉ゲテ祝シテ曰ク、「天我ヲシテ大功ヲ爲サシムルナリ。」ト。進ミテ平壤ニ逼ル。行長逆戰シテ大ニ之ヲ破リ、北グルヲ追ヒ、史儒算ヲ斬ル。承訓纔ニ身ヲ以テ免ル。時ニ辯士沈惟敬ト云フモノア

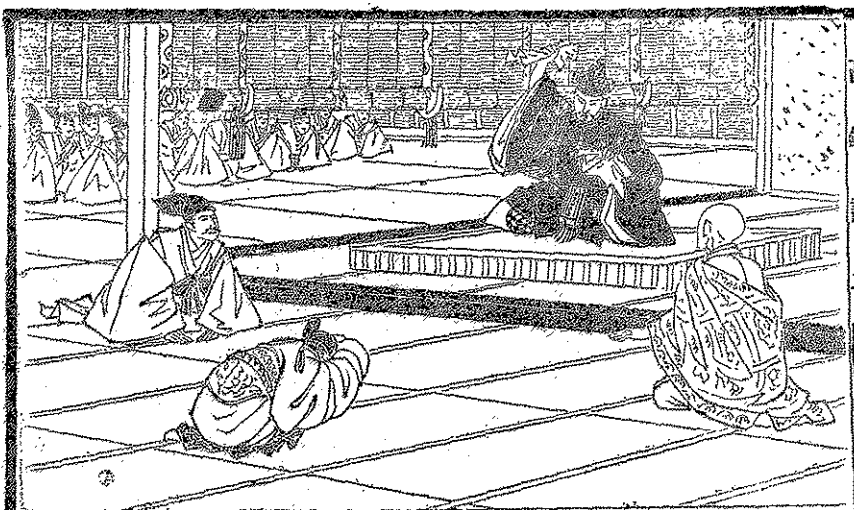
リ多ク金帛ヲ行長ニ致シ辭ヲ卑ウシテ和ヲ謀ル。行長悦ビテ遂ニ和ヲ約ス。

二年正月明將李如松大舉シテ平壤ヲ攻ム。行長始メテ惟敬ガ言ノ詐ナルヲ覺リ急ニ守備ヲ修メ殊死シテ之ヲ拒グ。時ニ援兵ナキヲ以テ行長敗レテ漢城ニ退ク。如松勝ニ乗ジ鼓行シテ南ス。小早川隆景立花宗茂毛利秀包等如松ヲ碧蹄館ニ邀撃シテ大ニ之ヲ敗ル斬首一萬餘級如松纔ニ身ヲ以テ免ル。

如松ノ敗報明ニ達スルヤ舉朝震駭ス。乃チ惟

敬ヲシテ再ヒ和議ヲ圖ラシム。惟敬厚ク行長ニ賂ヒ説キテ曰ク『大閣韓俘ヲ還サバ慶尙全羅忠清ノ三道ヲ割キ封シテ王ト爲サン。是レ足利氏ノ故事ヲ修ムルナリ』ト。行長素ヨリ不學ニシテ封王ノ故事ヲ知ラズ思ヘラク明國ニ王タルノ謂ナリト。乃チ秀吉ニ報ジテ曰ク『明人殿下ヲ封ジテ王ト爲サント欲ス』ト。秀吉之ヲ許シ韓ノ二王子ヲ放還シ戊ヲ釜山浦ニ置キ諸軍ヲシテ引キ還ラシム。

第十課 朝鮮征伐 其三



次開題ノ對册ヲ讀マシム

慶長元年九月、明使楊方亨、  
沈惟敬、韓使黃慎朴、弘長伏見  
ニ到ル。時ニ朝鮮未ダ三道ヲ  
獻ゼザルヲ以テ、秀吉韓使ヲ  
見ルコトヲ許サズ、特ニ明使  
ヲ延見ス。明使膝行シテ進ミ、  
敢テ仰ギ見ルナシ。秀吉侍史  
ヲシテ冊文ヲ讀マシム。文中  
爾ヲ封シテ日本國王ト爲ス

ト曰フニ至リ、秀吉色ヲ變シ、冊文ヲ地ニ擲チテ  
曰ク、『嚮ニ明我ヲ封シテ明王ト爲サントス、故ニ  
命シテ師ヲ班サシム。日本ニ王タルニ至リテハ、  
何ゾ彼ノ命ヲ煩ハサンヤ。且ツ吾ニシテ王タラ  
バ、天朝ヲ如何ト。乃チ行長ヲ召シテ之ヲ誚メ、即  
夜明韓ノ使者ヲ逐ヒ、令テ下シテ再ビ朝鮮ヲ伐  
タシム。』

翌年正月、小早川秀秋ヲ以テ元帥ト爲シ、兵十  
四萬人ヲ發シテ朝鮮ヲ伐ツ。諸將ノ部署皆前役  
ハ如シ。我が軍釜山浦ニ入ル。韓王驚キテ復タ援

ヲ明ニ求ム。明將邢玠、楊鎬等、大兵ヲ將、并テ來リ援ク。我ガ軍、山海ノ形勢ニ據リ、聯珠ノ砦ヲ築キ、以テ根據ノ地ト爲シ、進ミテ全羅ヲ陷ル。十一月、天漸ク寒シ、諸將退キテ要害ヲ守ル。明將清正ヲ蔚山ニ圍ム。城中飢渴甚ダシ。清正屈セズ。諸將赴キ援ク。清正城ヲ出デ、夾撃シ、大ニ明軍ヲ破ル。伏屍數十里ノ間絶エズ。是ニ於テ、明主楊鎬ヲ罷メ、萬世德ヲ以テ之ニ代ヘ、邢玠ヲ助ケテ來リ攻ム。我ガ軍四屯ト爲リ、秀秋ハ釜山ヲ守リ、清正ハ蔚山ヲ守リ、行長ハ順天ヲ守リ、島津義弘ハ泗川

ヲ守ル。明兵畏懼シテ敢テ來リ窺ハズ。我ガ軍モ亦深ク入ラズ。

慶長三年八月、秀吉病デ薨ズ。遺命シテ外征ノ師ヲ班サシム。此役ヤ前後六年、死スル者十萬餘人ナリトイフ。

第十一課 農事 其一

五穀は、人世生養の本にして、人間貴賤の命のかゝる所、農術は大なる業にして、神聖の至りて重んじ給へる理をば、略々會得する人ありとも。

農事をよく知らざる人は、猶世の風俗にならひて耕作の勤至れば福ある事を深く辨へずして、老翁が説を唯よくなき昔語りの譚語なりとよりに聞ける事も有りなん。農民も又秀でたる才なきはるか有るべし。是によりて翁が年ごろ耳に觸れ目に見し事ども多き中に、其内に二三を擧げて、其事を記し、農術の勤よく熟すれば必ず大なる福ある理の證となすべし。

茲に市中に隠れ閑居して、世の外なる老人あり。若年より諸家に仕へ、或は浪人となりて、國々

を経歴し、廣く世事を知れる者なり。此翁語りけるは、或る國にて少しの祿を得て、片山里に住む者あり。其勤も僅の事にて、常に暇有りければ、早年より下人に耕作せさせ、已れも農事を考へ計りて、樂どし、又渡世の助ともしけり。此男少く才ありて、年老いぬるまで、久しく農事に手馴れければ、農業に於て妙を得たる事多し。

又一年の内に、二三度も其國の長臣に出で、見にけるに、田舎に居て、別に語るべき事知らねば、已れ耕作に熟し、多く穀物を得たる事のみを

語りけり。生質陽氣なる男にて、其詞さへ田舎びていかめしければ、聞く人皆彼が放言偽なりと、面にくげに覚え、長臣も亦疑ひ思ひて、さらば我が采地の内にて、一段汝が云ふごとく作り見せよとて、取分き地味の悪しき村にて、悪田を擇ばせて、渡しぬ。はげ山の谷あひ、極めて礮地の常に、赤土色の水ありて、かなけのさび出づる地なり。彼の老人、此悪田を受取りて、つくづく打見て、其田の一方に、深さ三四尺に大溝を掘らせて、彼の悪水を落とし、其跡をたびくすき返し、春中日

に晒して干田となり、五月雨に苗を種ゑけるに、年久しき水田を、春中晒しこなして、陽氣をこめ、雨を得て腐らかし、柴草を多く入れて作り立てければ、稻の榮え、さながら淀の邊の蘆の如くで、き秋の實りも殊によくて、八俵餘の米を得たり。此田農人常に作りけるには、十年にも餘りて、其實り三俵に及ぶ年あれば、奇代の滿作とて、甚だ悦びけるとかや。

## 第十二課 農事 其二

又或る國の田舎に浪人の居けるが渡世の助に田畠を一年ぎりゝ買ひて下人に作らせけりある時うの里近き湊に干鰯を積みたる船泊りけるを聞きて農民ども打群れて干鰯買に行きけるに彼の浪人は價なかりければ富人の買ひたるを一俵貰ひてそれを木綿烟草の糞とゝ其餘の少し有りけるを五畝六畝ばかりなる田に入れて苗をうゑぬ。下地を能くこなゝ調へける故にや僅の肥なれども暑氣に及び稻大に榮は

て秋の實り米六俵餘を得たり。此里極めて地味あしく其年貢四つ物成にあたる事稀なり。然るに右の田のみは實り甚だよろゝとて其年十一歳の年貢をかけたりとかな。

又小身なる土深き山里に住みけるが下人の暇あればとて少ゝ田畠を作らせけるに五月雨の頃遠所に有りける子のもとより見舞として下人に酒肴などもたせ遣しけるを親甚だ悦び耕作の最中劇しき折節來るこゝ幸なれとて使の男を一日留め置きて田に入るゝ草をからせ

けるに、山中草多きところなるゆゑ、よき草を二  
十五六把切出しけり。前より刈り置きたる草に  
是を加へて、田に入れ、時分よく苗を種ゑければ、  
大に榮へはびこりて、秋に至り、米五俵半を得た  
り。此田も、農人前々より作りては、極めて豊年に  
あひても、漸く米二俵半ほど出来ぬれば、稀なる  
幸として悦びけるとなり。

右の事語りける老人は、一代一事の虚言もい  
はず、少く佛學など志して、其心ばせ、淨きものな  
りどて、あひあふ俗人まで、愛を加へ敬ひあへる

ものなり。此翁面り見たりし事なりと云ふ。又愚  
老が所々にて見聞きしにも、是に同じき事多け  
れども、一つ事を今更書付けんも、いたつがは  
くて止みぬ。

宮崎安貞……農業全書

## 第十三課

老成の言は侮るべからず

老人長者の言は、少壯の人情にて、これを聞け  
ば、迂闊なること多けれども、年の功を積みて、事  
どわざとを経し事、れほければ、後日に必ずしる

しあり。少壯の人は天資聰明の人といへども見識終に及ばざる所あり。然るを後生の輩は例て老人のことを迂闊とす。老人はその身に試みて効ある言を以て訓となさんとす。然るに後生は聞くを厭ひて之をうしる。其もの年やうやく長し事に涉ることやうやく多きに及びて始めて老成の言の佩服すべきを悟る。これはたのが險阻艱難をつぶさに嘗めたる後にあらざれば知り難し。

荒井堯民……梧坡教諭

第十四課 青木昆陽

昆陽は名を敦書字を原甫通稱を文藏といへり。武藏の人なるが一たび京都に上り伊藤東涯の門に入りて儒學を學べり。然れども訓話の業を嫌ひてひたすら實用をのみ主としたり。

昆陽常に思へるやう凡そ律に罪科を負ひて遠流に配せらるゝもの一旦死を宥めらるゝ限りは天命を終へしめんの義なるべし。然るに諸島の地は概ね饒确にして五穀熟せず中には沃

饒なるもあるべけれど時に凶歳のあらんをいかゞはせん。是のみならず諸國の農民粒々辛苦に一生を齟齬しながら一朝凶荒にあへば餓莩野に盈ち草賊衢に起りて天下の患となること歎くにたへたり。若し穀物にかふべき食料あらば餓莩を救ひ草賊を鎮め且は流人の餘命をも全うするよすがなるべし。それには蕃薯こそ良菜ならめ。されども其功德と種藝の法とを知らしめずば益をからんとて年來考究せる事どもを懇に書き集めて之を幕府に奉りしに將軍こ

れを覽て奇特の事なりとて官資を以て刊行し、普く諸國諸島に頒ちて便宜に種藝せしめしかば是より庶民凶歳にあへども蕃薯を糧として飢ゑを免るゝに至りしよりその惠を語りあひつゝ世上にいつとなく昆陽を崇めて甘藷先生と呼びなせり。

されば元文四年處士より直に幕府の吏員にあげられ後評定所の儒者となり又御書物奉行に昇進せり。昆陽はしめ白石の著書に就て粗蘭人の説を窺ひ大に發明する所ありてよりく

蘭書を講讀せしが當時の將軍吉宗も推歩の學を好み和蘭の其術に精ゝきを知り猶も其説を聞かんとて昆陽に命じて蘭語を學ばしめたり。其後延享元年に至り命によりて長崎に往き親しく蘭人に就き又譯官にも謀りて倍原書を講習せり。年を経て江戸に歸り大に蘭學の擴張を計らんとせしが惜むべし吉宗將軍の薨去にあひしかば其事遂に止みにき。

前には白石ありて蘭學の端緒をば開きたれども當時なほ禁書の令ありて公に原書を講ず

るを得ざりしに昆陽の時よりして禁令解けたり。近世洋學の盛になれるは昆陽が唱導の力に賴る事多きに居る。

## 第十五課

## 世界周遊

## 其二

支那ハ世界ノ舊國ニテ四千年以前ヨリ文學技藝既ニ進歩シ四隣ノ國ニ其風教ヲ及ボセリ。有名ナル孔子ハ此國ニ生レタル大聖人ナリ。我が國ノ支那ト交通セシハ今ヨリ凡ソ一千三百年前隋ノ代ニ在リ。支那ハ古ヨリ定マリタル國



長城ノ石碑

號ナク天子ノ代ニヨリテ其號ヲ異ニセリ。周秦漢隋唐宋元明ハ皆舊時ノ國號ニテ今ハ清ト曰フ。我が弘安年中元兵十萬大舉來襲スルニ及ビテ北條氏之ヲ九州ノ海上ニ墜ニシ大ニ國威ヲ耀カシ、コトハ諸子ノ既ニ聞キタル所ナルベシ。

支那ノ京城ヲ北京ト曰フ。世界大都ノ一ニテ、宮殿樓閣最モ美麗ナリ。然レドモ道路市店頗ル雜沓ヲ極メテ清潔ナラズ。萬里ノ長城及ビ運河ハ世界屈指ノ大工事ナリ。長城ハ昔秦ノ始皇帝

ガ、匈奴ノ襲來ヲ防ガン爲ニ築キシ煉瓦ノ城壁ナルガ、其長サハ五百十餘里ニ亙リ、高サハ二丈五尺、厚サハ一丈五尺アリ。運河ハ天津ヨリ起リ、黃河、楊子江ヲ過ギテ、杭州府ニ達ス、其長サ二百七十餘里アリ。

上海ト香港トハ、共ニ船舶輻輳ノ要地ニテ、通商貿易極メテ盛ナリ。上海ニハ我ガ商店多シ。此地ニハ我ガ國ノ領事廳ヲ置キ、郵便局ヲ設ケラル。香港ハ廣東府ヲ流ル、珠江口ノ島中ニ在リテ、今ハ英國ノ所領ト爲レリ。我ガ國ヨリ西洋諸

國ニ航スル人ハ、必ズ此港ニ寄泊ス。橫濱ヨリ航程四日ニシテ達スベシ。

又香港ヨリ西スルコト三日程ニシテ、馬來半島ノ新嘉坡港ニ着スベシ。此地モ亦英國ノ所領ニテ、東西往來ノ船舶必ズ寄泊セザルナシ。土地赤道直下ニ當レルヲ以テ、氣候ハ頗ル炎熱ナリ。

#### 第十六課 財を用ふる法

儉約にして財を費さゝるは尤も良法なり。然れども儉約を行ふに事寄せて、財を吝みて禮義

を缺き、仁愛を施さざるは鄙狹と謂ふべし。是れ儉約に非ず、吝嗇なり。不徳なり。禮義を務めて財を用ふべく、與ふ可き時ならば、財を惜まずして潔かるべし。

又貧窮を救ふに於ては、財を惜む可らず。我身には儉約にして、人に施すには財を惜まざるは、是れ善なり。我身には奢り費して、禮義を缺き、人に施し惠まざるは、不徳なり。財を惜みては善を行ひ難しと、古人も云へり、宜なるかな。

又無益の事に財を費して惜まざる人有り。愚

なりと謂ふべし。無益の事に財を用ふるは淵に棄つるに同し。是れ善を行ひ人を救ふの道を知らず、其志無き故なり。むげの事なり。

凡そ一年の衣食の費は多からず。やどりは茅屋一間に起臥して足りぬ。下部は我勞に代はる人の外は無くても事闕けず。器はたゞ飲食の器、日用の調度のみ助となる。其外の器皆用なし。人の身を養ふには、此數多の物に過ぎず。之を備ふるはさ程の費多からず。然れば財祿有る人、儉約をだに行はざる、みづから奉ずるに餘有るべし。不

足して人に乞ひ借るに及ぶ可らず。

然るに財用を多く費し過ごし人に乞ひ借り、自ら困窮に至り、一生身を苦め人を苦め子孫まで困窮せしむるは哀むべし。是れ用財の良法を知らざればなり。

貞原篤信……家道訓

第十七課 金ヲ借ルコトノ危キ事

諺ニ空虚ナル囊袋ハ直上ニ立ツコト能ハズト云ヘルガ如ク、借債ヲ負フ人モ亦正シク立ツ

コト能ハズ。蓋シ人債欠ヲ負フトキハ必ズ眞實ノ行ヲ缺クニ至ルベシ。故ニ諺ニ欺僞ハ借債ノ背上ニ騎スト云ヘリ。金ヲ借ル人ハ往々ソノ債主ニ向ヒテ金ヲ返ス期限ヲ延サン爲メニ、虚誕ノコトヲ捏造シテ托辭トスルコトナリ。故ニ借債ニ於テ一步進ムトキハ欺僞ニ於テ亦一步進ム。カクノ如ク借債欺僞互ニ相陸續追隨シテ、一生ノ路ヲ行クコト豈悲シカラズヤ。畫家海曇自ラソノ衰微セシ起リヲ始メテ金ヲ借リタル日ニ歸シテ曰ク「金ヲ借ルコトニ往クモノハ憂ヲ

取ルコトニ往クナリトイヘル古諺ヲ吾ガ身上  
ニ的實ニ覺エタリト。又一少年始メテ海軍ニ入  
ル時海氏コレヲ戒メテ曰ク「他人ヨリ金ヲ借ラ  
ズシテ買ハル、時ニ至ルマデハ決シテ何物ニ  
テモ買フコトナカレ決シテ金ヲ借ルベカラズ、  
金ヲ借ルハ自ラ我ガ身ヲ賤シクスルナリ。予決  
シテ汝ニ金ヲ借サズトハ云ハズ、タゞ汝ニ借シ  
テ汝コレヲ償フ能ハザレバコレ予レ汝ノ品行  
ヲ壞ルナリ」ト云ヘリ。

中村正直……………西國立志編

第十八課

世界周遊

其三

新嘉坡テ出帆シテ西ニ進航スレバ印度ノ南  
海岸ナル錫蘭島ノころんぼニ着スベシ。印度ハ  
謂ハユル天竺國ナリ。釋迦如來出生ノ地ハ實ニ  
此錫蘭島ナリ。此國學術工藝ノ早ク開ケシコト、  
世界中其右ニ出ヅルモノナシ。釋迦ハ今ヨリ三  
千年前ノ人ニテ其教ハ東漸シテ支那朝鮮ニ波  
及シ遂ニ我ガ國ニ傳ハレリ。

然ルニ印度ハ元來小國分立シテ一統ノ君主

ナカリシガ爲メ、屢西洋諸國ノ侵略ヲ被リ、現今其十分ノ九ハ英國ノ領地ニ屬セリ。國內ニハ猛獸毒蛇多ク、獅子、虎、犀、象、鰐魚等ノ害ヲナスコト實ニ大ナリ。此國ノ北境ニハ喜馬拉耶山アリ、高サ凡ソ二萬九千尺ニシテ、四時ニ雪ヲ戴キ、世界第一ノ高山ト稱セラル。

錫蘭島ハ寶石ニ富メル地ニテ、金剛石其他ノ珠玉ヲ出ダスコト最モ多シ。土人ハ過半佛教ヲ信ズレバ、從テ伽藍ノ大ナル者モ少カラズ。

ころんぼヨリ西ニ進メバ、亞拉比亞海ヲ經テ、

亞拉比亞ノ亞丁ニ着スベシ。亞拉比亞ハ駿馬ノ產アルニ由テ聞ユ。此土ノ馬ハ骨格逞シクシテ力最モ強シ、實ニ天下ノ良種ナリ。マタ護謨ヲ出ダスコト多シ、謂ハユル亞拉比亞護謨是ナリ。

亞拉比亞ハ全國殆ト沙磧ニテ、唯沿岸ノ地ニ二三ノ都邑ヲ見ルノミ。亞丁ハ紅海出入船舶ノ碇泊スル處ニテ、英國ノ所領タリ。西岸ニハ麥迦及ビ麥地拿ノ名邑アリ。麥迦ハ回々教ノ開祖摩哈麥ノ降誕セシ地ニテ、麥地拿ハ其入寂ノ處ナレバ、信者ノ參拜頗ル多シ。

紅海ヲ北ニ向ヒテ進航スレバ亞弗利加洲ノ

蘇士運河

ヲ通過ス。

此運河ハ、

明治ノ初

年ニ始メテ疏

通セシモノニテ其

未ダ開鑿セザリシ

時ハ東西航行ノ船

舶皆亞弗利加洲ノ

蘇士運河ノ圖



南端ナル喜望峰ヲ迂回シタリ。サレバ數十日ノ

日子ヲ費シタルノミナラズ風波ノ險亦甚ダシ

カリキ。運河ヲ通過スレバ即チ地中海ニ出ヅ。ほ

ーどさいどノ良港アリテ船舶必ズ此ニ寄泊ス。

亞弗利加洲ハ全土殆ト未開ニシテ廣闊ナル

原野ニ過ギズ。近年歐羅巴人内地ノ探檢ヲ試ム

ル者少カラズ。中ニモ其効ヲ奏セシモノヲすた

んれいトス。蓋シ内地ハ草木深ク茂リテ道路通

ゼズ深莽ノ中猛獸毒蛇多ク且ツ土人往々人肉

ヲ啖ヒ各處ニ居住シテ旅人ヲ見レバ直チニ殺

害スル等ノ危険アルガ爲メ、實ニ困難ノ業タルナリ。

第十九課 馬盜人

昔亞拉比亞にナーベルといふ人ありて、類ひ稀なる駿馬一頭を持ちたるが評判遠近にかくれなかりしかば、ダーヘルといふ人いたく之をほしがりて、己が財産を擧げて、此馬を買はんと望みしかども、ナーベルは中々承知せず。されば、ダーヘルはほとんど絶望せし程なりしが、猶も

初念は全く消え難くして、遂に一計を案じ出だせり。

こゝにダーヘルは、或る草の汁液を顔に塗りつけて容貌を變へ、襤褸に身を纏ひ、片足を包みなどして、乞食の様を装ひ、駿馬の持主ナーベルが通行する道端に待ち居たり。

さてナーベルは、彼の馬に跨り、此方に來かりしかば、ダーヘルは馬の前より身を投げ出だして、いとも憐れなる聲をしつゝ、奴は圖らずも途にて病にかゝりたり。此處より一步も動くこと

高等讀本 第三十卷 第三十回  
能はざることを最早三日に及び候へば、今は飢ゑ  
果て、唯最期を待つばかりに候。慈悲深き殿よ、  
いかで露の命を助け給へ」と息も絶えゝに訴  
へしに、ナーベルは元來慈悲深き人なりゝかは  
計略に乗るとは知らず、さらば此馬にて伴ひ歸  
らんと曰ふ。

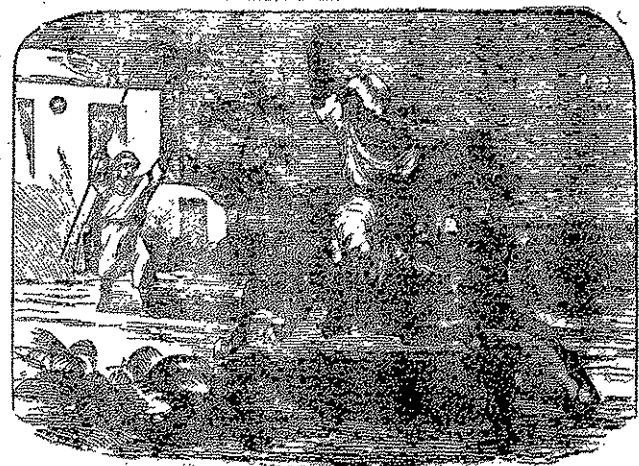
されどダーヘルは猶も、奴は弱り果て、馬に  
跨ることも出来候はず」と曰ひしかば、益あはれ  
と思ひ、己れ馬より下りて、此偽乞食を扶け乗せ  
たるに、乗るや否や、ダーヘル馬に一鞭あて、余は

ダーヘルなり、汝固く余が請を承諾せざりゝか  
ば、かくたばかりて奪ひゝなり」と高らかに罵り  
つゝ、雲を霞と騙け出だせり。

ナーベルは驚きながらも、暫く待て、言ふ事あ  
り」と呼び止めゝに、我は馬上彼は徒歩、追捕せら  
るゝ患なしと知りたれば、ダーヘルは馬を二三  
間彼方に止めて、何の用ぞと問ひ返す。

ナーベルは、汝我が馬を奪ひゝも天命なれば  
仕方なし。唯余の願ふは、汝が如何にして余が馬  
を奪ひゝかを人に語ることなからんことを」と

曰ひしかば、ダーヘルそれは何故ぞと問ふ。



朝待つて言ふ事あり

ナーベル「さればなり世の人若し此事を聞かば他日眞實に病み疲れたるものある時たとひこれを見る人ありとも又余の如く欺かれんを惧れてこれを助けざるに至るべし。されば汝は人の慈善の行を妨ぐる基となるべし」

と曰ふ。

此一言を聞きて、ダーヘルはいたく耻ぢ入り、暫時はものも言はざりしが、忽ち馬より飛び下り、之をナーベルに返して、其罪を謝あたり。これよりナーベルは、ダーヘルを我が家に伴ひ歸り、數日の間鄭重に饗應したりしが、遂に兩人は刎頸の交を結びとぞ。

第二十課 自暴自棄

自暴自棄と云ふは何様のいましめを聞きても、用ふる事なく、人の善事を見ても、學ばんども

思はず、只我が儘にして、我が惡き事を改むべしといふ志も無く、或は善事は我等如きの言て成らぬ事なりと、片付け置きて、我と我が身を棄物にして、惡事を仕通し、少しも善事に進む心無きなり。此の如く自暴自棄なる人は、人面獸心として、顔は人の顔なれども、心は獸の心なり、志を起して、惡き事を改むるならば、など善人にならざらんや。

伊勢貞文……貞文家訓

第二十一課 世界周遊 其四

地中海沿岸ノ國ニハ、古來歷史上有名ノ地多シ。中ニモ小亞細亞、希臘、以太利ヲ以テ最トス。小亞細亞ハ、上古ヨリ人民ノ繁殖セシ國ニテ、古蹟頗ル多シ。其地中海ニ瀕スル地方ハ、古ノ猶太國ナリ。京城に在るされむハ、今猶ホ繁昌ス。城外ニベつれへむノ名邑アリ。即チ耶蘇基督ノ誕生地ナレバ、教徒ハ之ヲ神聖地ト稱シテ、諸國ヨリ巡拜スル者少カラズ。

希臘ハ歐洲開化ノ根本ヲ爲シタル國ナリ。京

城雅典ハ古代歐洲學藝ノ中心タリシヲ以テ今ニ至ルマデ天下ノ人其名ヲ知ラザルハナシ。以太利ノ羅馬府ハ希臘亡ビテヨリ文學技藝ノ隆盛ヲ致シタル地ニテ天下ニ有名ナリ。府内ニハ古代ノ名畫彫刻等夥シク寺院堂宇ノ壯麗ナル者亦多シ。

地中海ノあゝりー島ニ有名ナル火山アリ。たとふ山ト曰フ。燄々トシテ火烟ヲ噴キ地中海ノ燈明臺ト稱セラル。地中海ト大西洋ト通ズル處ハ謂ハユルドぶらるたるノ海峽ナリ。其北岸ニ

ハ英人砲臺ヲ構ヘテ之ヲ守衛ス。此地ハ元ト西班牙國ノ中ナレドモ今ハ英領ニ歸セリ。實ニ地中海ノ咽喉ニテ要害無雙ト稱セラル。

昔ハ東洋ヨリ歐洲諸國へ渡航スルニハドぶらるたる海峡ヲ廻リタレドモ今ハぽーどさいど港ヨリ直チニ以太利ノぶりつちーゆニ航シ更ニ汽車ニヨリテ歐洲諸國ニ出ヅルナリ。ぽーどさいど港ヨリぶりつちーゆヲ經テ英國倫敦ニ達スル時間ハ凡ソ四日半ナリ。

## 第二十二課 珊瑚の話

珊瑚を用ふることを知りたるは、極めて舊けれども、其性質を明にしたるは、遙に後の世にあり。かの古代の野蠻人と雖も、尙且つ珊瑚を以て、小刀、斧の柄の飾りと爲すことをば知りたるが、後漸く人智開けて、鐵を利用し、武器等を造るに至ては、珊瑚を以て、楯若くは冑の飾りと爲し、或は婦人の頭飾、服裝等と爲すに至れり。是れ其色赤くして美なればなり。然れども、此等の野蠻人は、言ふも更なり、智識開發したる人民にても、尙

未だ珊瑚は何質のものなるかを知らんと欲するの念なかりしは、明なる事實なり。

かくて、人智尙ほ一層高く進みたる時に至り、漸く珊瑚の性質如何に就て考究する事おこれり。されども、尙ほ久しく一定の確説はあらざりしなり。此等の人民が第一に断定せしは、珊瑚の質甚だ堅牢にして、且つ美麗の光澤あるが故に、礦物なりとせしこと是なり。其後尙ほ幾多の経験に依て、智者は總じて植物なりとの断定を下したり。是れ珊瑚の幹部は、他の樹木と均しく、數

多の輪より成り、又此幹部より枝を生じ、枝の皮は薔薇色を爲し、皮の内には星の如き小さき花あればなり。

然るに茲に一の疑問あり。曰く「珊瑚を目して植物なりとせんか、植物にして其質の堅きこと恰も石の如くなるは、果して如何の理由に基けるぞ。植物中其質の斯の如きものは、決して此他に例を求め得べからざるなり。」

漁夫等は、右の疑問に答へて曰く「珊瑚の尙ほ水底に在る時は、恰も右の植物の如く、其質甚だ

柔かなり。されども之を水中より引上げて、空氣に觸れしむれば、忽ち化石して堅くなるものに相違なく」と。

右の如き説の行はるゝこと、既に二千年の久しきに及び。然るに佛國の醫師ペーソンチルと云へるものありしが、會地中海の海岸を旅行するに際し、同所にて珊瑚採獲の盛に行はるゝを視て、大に感ずる所あり、乃ち珊瑚を取て、謂はゆる珊瑚の花なるものを仔細に觀察せしに、終に花にあらずして、一種の動物なることを見出

だしたり。如何なる點より視ても花たるべき資格は決して有せざりとなり。即ち雄藥もなければ雌藥もなく、又花粉もなく、種子を生ずべきものもなく。唯形の聊か花に似たる所あるに過ぎざるのみ。

然れども、多年行はれたる舊説は一朝田舎醫師の新説を以て、容易に破られ得べきにあらずれば、當時珊瑚を動物なりと信ずるは僅にペーソンチル氏一人のみにして、其他の人々は、擧げて珊瑚は植物にて花咲くものなり、との説を信



珊瑚の海底に在る状

じ居たり。

然れども、誤信は永續すべきにあらず。茲にニコライと云へるものありて、珊瑚採獲の監督者たりしが、珊瑚の水底にある時、果して柔にして撓み易きものなりや否やを實地に試みんと欲し

其部下中の最も老練なる潜水夫を選びて之に其探索を命じたるに、珊瑚の堅きことは水中に於けるも矢張り空氣中に於ける時と全く同一なりと復命したり。ニコライは之を聞きて大に驚きつゝ、愈實證を得たしとて更に自ら水中に入りて之を試みゝに、果して其言の違はざることを見出だしたり。

尙ほ此他にも珊瑚に就ての考究は種々爲されゝより、ペーソンネル氏の説愈正確なりと定まりたり。即ち珊瑚の枝に小さき星の如き飾り

と見ゆるは全く一種の動物に外ならず。數千百年間學者が無智なる漁夫等の言ふ所を信じて、敢て其他の探究を爲さんともせざりしは實に無智も亦甚だしいといふべし。

是より後學者頻に珊瑚蟲の性習如何に就きて考究する所ありゝに、實に人の耳目を驚かすべきことを發見せり。

## 第二十三課

## 珊瑚の話

其二

抑珊瑚蟲は其形極めて小なるが故に顯微鏡

の力を借るにあらざれば明に見ること能はず。此小蟲は圓筒形にして、其一端に口あり。口の周邊に數多の觸手あり。是れ花の如き形を現する所なり。此小蟲の食物を得るは、此觸手の作用に基つけるなり。其食物は、死魚の極小なる分子、或は大魚の口中より發する動物質等なり。斯の如く食物を取て、其身を養ふ所以を知ると雖も、之を聞き、之を視るべき力を有するの痕跡なく、又之を手にするも、自ら感ずべき力を有せざるもの、如く。且つ此小蟲は、生來一所に停住して、毫

も他に移轉することなく。

此小動物は、動物中にて最も下等に屬するものなり。數個となく層々相重なりて、水底に大なる石の林とも謂ふべきものを構成するのみならず、峨々たる巖石の障壁重疊せるかと思ゆるものあり。其廣大なるものに至ては、時として數十百里に互れるものさへあり。而して珊瑚は、此動物の體軀中に存する石灰様の物質と。其死後の石灰様の體軀より成れるものに外ならず。

珊瑚蟲の群生するは、溫暖なる地方に限れる

ものなり。珊瑚蟲は寒氣に耐へ得べきものにあらず。又空氣中には其生を保つこと能はず。是れ水面より離れて其働きを爲すこと能はざる所以なり。

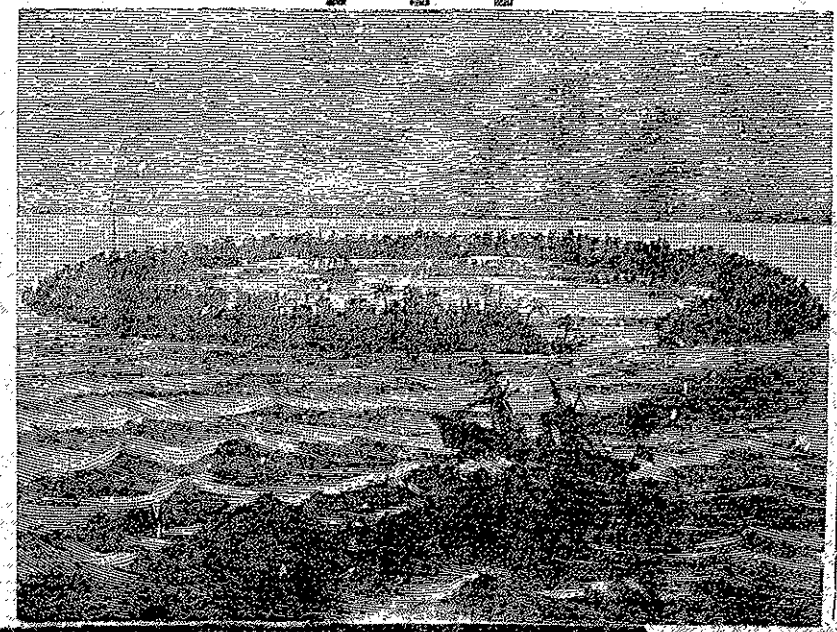
枝分せる珊瑚に三種類あり。白色、赤色、石竹色是なり。此内白色は孔隙多くして、其價最と低けれども、石竹色に至ては甚だ稀なるが故に、其價最も高し。

珊瑚蟲は赤道の南北各三十度以内に在りて盛に繁殖し、或は數百里に跨る所の島嶼を作り、

或は渺茫たる大洋の中央に、安全の良港をなす者あり。細微なる蟲の事業も亦偉なりといふべし。此小動物が之を造る初めの手續は、遙か大洋の下底なる砂中に業を起し、之を怠らず、次第次第に高く積みあげて、終に岩石の壁の如くなりて、水面に現はるゝに至る。既に水面に現はれたる以上は、最早其工を進むる能はずして、業ここに卒れるものとす。此等の壁は、概して廣き圓形を爲せるものなり。

かくて岩石の如く成れる珊瑚の壁、水面上に

達したる時は波浪絶えず其上を経過し従て小砂及び珊瑚の碎片を携へ來りて其上に留むべし。此作用絶えずして終に波濤其上を経過すること能はざる程の高さに達し遂に一種異形の島嶼を造れるなり。此島嶼は廣く圓形を爲せる



岩石より成れるが故に其中央に自から一面の平湖を形づくれり。斯くて又波浪絶えず此岩石の上に小砂を携へ來り従て中央なる湖水の中に小砂を落し久き年月を経る内に遂に若干の地所を生じ雜草と海草と其面に生じ葉枯れ根死したる草は其地を膏腴ならしめ而して風亦他の海岸より棕櫚其他種々の植物の種子を携へ來りて此島嶼に播し以て忽に花を看鳥を聞くべき綠野たらしむるなり。

倫敦ハ天下第一ノ大都會ニテ、人口三百餘萬アリ。市街ハ高厦大樓櫛比シ、富豪巨商薈ヲ並べ、電線ハ蛛網ノ如ク、瓦斯燈ハ滿街ニ耀キテ、夜猶ホ晝ノ如シ。鐵道ハ縱横ニ通ジテ、其人馬雜沓ノ處ニ至リテハ、地中ニ隧道ヲ設ケテ、汽車ヲ通ズルノミナラズ、河底ニモ亦鐵道ヲ通ズルニ至ル、誠ニ天下ノ奇巧ナリ。街衢清潔ニシテ、家屋橋梁宏壯ヲ極メ、百貨輻輳シ、通商貿易ノ盛ナルコト、宇内ニ其比ヲ見ズ。此國ハ海軍ノ强盛ナルコト

萬國ニ冠絶セリ。諸國通商ノ要路ニハ、堅固ナル城堡ヲ築キ、大ニ石炭兵糧ヲ貯ヘ、平時モ三四百萬ノ兵ヲ備フ。

英國對岸ノ國ニ和蘭、佛蘭西、獨逸アリ、獨逸ノ隣ニ魯西亞アリ。皆歐洲中ノ文明國ニテ、文學技藝夙ニ開ケ、交通貿易盛ニ行ハル。和蘭ハ國土頗ル小ナレドモ、早クヨリ東洋諸國ニ往來シ、殊ニ我が國ニ對シテハ、最モ古キ交際國ナリ。今日洋學ノ盛ナルハ、實ニ和蘭人其端ヲ開キシナリ。此國通商ノ盛ナルコト、今尙ホ昔日ニ異ナラズ。

佛蘭西ノ京城ヲ巴里ト曰フ。天下大都ノ一ナリ。諸子ハ嘗テ拿破侖ノ名ヲ聞キシコトアラン。此人古今ノ英傑ニテ匹夫ヨリ起リ佛蘭西ノ帝位ニ登リ四隣ヲ震懾セシメタルコト宛モ我が國ノ豐太閤ニ似タリ。然レドモ彼ハ一國ノ帝位ニ登リ此ハ一國ノ武權ヲ握リシナリ。抑西洋諸國ハ萬世一系ノ帝王アルコトナク英雄豪傑一タビ機運ニ乗ズレバ忽ニ帝王ト爲リ大統領ト爲ルコトヲ得ルナリ。之ヲ我が國ノ一天萬乗ノ至尊ヲ戴ク國民ニ比スレバ其差殊ニ甚ダシ。實

ニ我が國ノ如ク皇統連綿トシテ天地ト與ニ窮リナキハ宇内ニ又アルコトナク盛ナリト謂フベシ。

獨逸ハ二十六邦同盟シテ組成セル國ナリ。中ニモ普魯士ハ歐洲強國ノ一ニテ京城ヲ伯林ト曰フ。兵卒ノ多クシテ精鍊ナルト國民ノ銳敏ナルト教育ノ善美ナルトハ最モ秀デタリ。現今我が國ノ兵制及ビ教育ハ模範ヲ此ニ取ルモノ多シト云フ。

魯西亞ハ境域ノ廣大ナルコト天下無比ナリ。

我が國ノ北端ナル樺太及ビカムチャツカモ皆其領地ナリ。魯西亞ノ大サヲ謂フトキハ亞細亞ヲ三分シテ其一ヲ有チ歐羅巴ヲ二分シテ其一ヲ有テリ。故ニ其土地ノ廣サハ全歐洲ニモ越エタリ。然レドモ本國ノ地及ビ亞細亞ノ領地ハ荒寒ノ原野多キガ故ニ其利ハ却リテ大ナラズ。

魯西亞ノ國都ヲ聖彼得堡ト曰フ。此國ニハ昔豪邁ノ帝王アリ、彼得大帝ト云ヘリ。大帝自ラ國土經營ノ策ヲ講シ、萬世ノ家法ヲ子孫ニ貽セリ。家法トハ何ゾ。曰ク「四海ヲ混一シテ魯帝ノ配下

タラシメヨ」ト。故ニ今尙ホ氣運ノ到ルヲ待ツモノ、如シ。樺太ハ元我が國ノ領地タリ、土地開ケズ、人烟稀疎ニシテ、魯人雜居ノ域タリシガ、毎歲兩國人ノ交渉煩ハシキヲ憂ヒ、明治八年我が國ヨリ之ヲ魯西亞ニ附シ、魯領ノ千島ヲ我ニ屬シ、以テ北方ノ境域ヲ明ニシタリ。

## 第二十五課

## 鐵ノ種類

鐵ハ金屬中最モ要用ナルモノナリ。若シ此世界ニ鐵ナキトキハ世ハ必ズ野蠻タルヲ免レザ

高等 讀本 五十二  
ルベシ。汽車汽船ノ便利モ鐵ニ非ザレバ其用ヲ  
ナスコト能ハズ。器具器械ノ裝置モ鐵ニアラザ  
レバ成ルコト能ハズ。農夫モ鐵ナキトキハ耕耘  
スルコト能ハズ。工人モ鐵ナキトキハ建築スル  
コト能ハズ。其他彫刻ノ技藝ヨリ、庖厨ノ料理ニ  
至ルマデ、一トシテ鐵ノ用ヲ藉ラザルモノナシ。  
然レドモ、上古蒙昧ノ世ハ鐵ノ用ヲ知ラザリキ。  
蓋シ鐵ハ天然純鐵トナリテ生ズルコトナク、常  
ニ石ノ如キ朴鐵トナリテ産スルモノニシテ、其  
内ヨリ純鐵ヲ得ルコトハ甚ダ容易ナラザルニ

由ルナリ。此ノ如キ時代ニ在リテハ、人皆銅或ハ  
青銅ノミヲ用ヒ、尙ホ一層古代ニ於テハ、石斧、石  
刀等ヲ用ヒタリト云フ。

鐵鑛中最モ要用ナル者ハ酸化鐵ナリ。乃チ炭  
火ヲ以テ之ヲ灼ケバ、其中ノ酸素離レ去リテ純  
鐵トナルベシ、之ヲ鍛鐵ト云フ。熱シテ赤色トナ  
シ、鍛ヘテ以テ釘、鋤、鍬、及ビ車ノ輪等ヲ造ルニ、意  
ノ如クナラズト云フコトナシ。又之ヲ撃チ延バ  
セバ、板トナスベク、兩片ヲ熱シ、合セテ鎚撃スレ  
バ、粘着シテ復タ離ル、コトナシ。

又鑄鐵ト稱スルモノアリ。其要用ナルコト鍛鐵ニ亞グ。熔解シテ模型ニ鑄入シ以テ諸器物ヲ製作スベシ。鐵管、鐵柵及ビ鍋、釜ノ類ハ皆此鐵ニテ造ルナリ。鑄鐵ノ性ハ鍛鐵ニ異ナリ、熱シテ打チ延バスコト能ハズ、鈍ヲ以テ之ヲ打テバ脆クシテ碎クルコト、恰モ玻璃ノ如シ。蓋シ鑄鐵ハ純粹ノ鐵ニ非ズ、其中ニ幾多ノ炭素ヲ含有ス。故ニ法ヲ設ケテ炭素ヲ去レバ變ジテ鍛鐵トナスヲ得ベシ。

又鋼鐵ト名ヅクル一種ノ鐵アリ。剃刀、小刀、其

他一切ノ利器ヲ造ルニ用フ。其性強クシテ且ツ堅ク、礪ギテ利ヌトナスヲ得ベシ。鋼鐵モ亦少シク炭素ヲ含ムモノニシテ、之ヲ製スルニハ鍛鐵若クハ鑄鐵ヲ以テス。鍛鐵ヲ以テスルトキハ之ニ炭素ヲ加ヘ、鑄鐵ヲ以テスルトキハ其炭素ノ幾分ヲ去ルナリ。

## 第二十六課 觀世太夫の傳

觀世太夫が木賊刈の能を一人の農夫ありて衆人の中らちまぐりて見しが、木賊刈の手ま

高等讀本 第二十七課 世界周遊 其六  
へをみて、觀世太夫は、いまだ木賊かる事をうら  
ずとつぶやきぬ。それを觀世聞きつたへて、その  
農夫に、いかなる事と尋ねぬれば、農夫いふ、され  
ばとよ、木賊を刈るは、鎌を逆手ににぎりてかる  
なり。艸などをかるが如くにしては、かれぬもの  
なり」と答へけり。それより、觀世鎌を逆手ににぎ  
りけりとなり。技藝といへども、名家となるもの  
は、衆のそくりをいれて、其藝をみがくことなり。

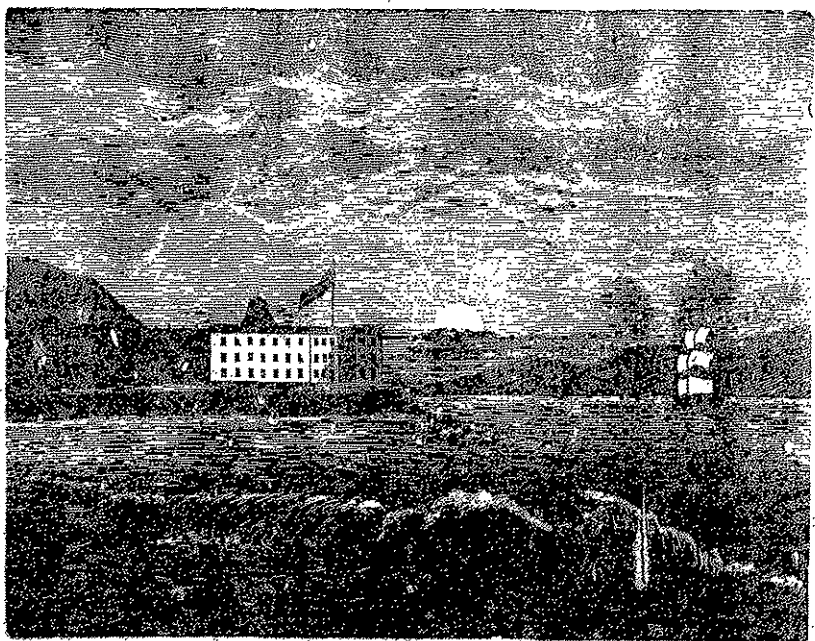
畑鶴山……四方の硯

第二十七課 世界周遊 其六

倫敦ヲ發シ、西ニ向ヒテ大西洋ヲ進行スレバ、  
航程六日ニシテ北米合衆國ノ紐育ニ達ス。亞米  
利加洲ハ稱シテ新世界ト云ヒ、亞細亞、歐羅巴及  
ビ亞弗利加ノ三大洲ヲバ舊世界ト云フ。新世界  
トハ、此地ヲ發見セシハ、今ヨリ僅ニ四百年前ニ  
過ギザルコトナレバ、其以前ニハ、其有無ヲモ知  
ルモノナカリシ故ナリ。コレヲ發見セシハ、以太  
利ゼのあノ人、闢龍トイフ者ナルガ、爾來歐人相  
踵ギテ渡航シ、盛ニ深林曠野ヲ開拓セシヨリ、千

古荒漠ノ地變シテ今日文明ノ域ニ化セリ。

紐育ハ交通貿易ノ要地ニテ北米合衆國第一ノ都會トス。紐育ノ北ニ浮すとんアリ、南ニひらでるひや及ビ華盛頓アリ。華盛頓ハ合衆國初代ノ大統領華盛頓ノ建設セシ所ナリ。初メ此國ハ英國ノ版圖ニ屬セシガ、今ヨリ百餘年前華盛頓大元帥ト爲リテ獨立ノ軍ヲ起シ、血戰八年ニシテ遂ニ英國ノ羈絆ヲ脱シ、北米合衆國ト稱シ、同盟共和ノ政府ヲ建テタリ。即チ合衆國トハ現今三十八州ノ共和國ヲ謂フナリ。



桑港金門ノ圖

紐育ヨリ合衆國ヲ橫截スル鐵道二條アリ。一ハ桑港ニ達シ、一ハばんくーばーニ達ス。各行程凡ソ四日ニテ通過シ得ベシ。途中ニハ茫々タル曠野アリ、洋々タル巨流アリ、峨々タル峻峰アリ。中ニモみしゝつび河ノ

如キハ、一千六百餘哩ノ長流ニシテ、世界第一ト稱ス。

桑港ヨリ我が國ノ横濱ニ到ルニハ、太平洋ヲ直航シ、行程二十日ヲ要ス。其海路ハ凡ソ四千四百哩ナリ。

世界周遊ノ行程ハ、凡ソ二萬四千哩ニシテ、四十三日ヲ要スルナリ。往年ハ、七十日ヲ費シテ世界ヲ周遊セシテ、空前ノ事業ト稱讃シタレドモ、今ヤ航海鐵道ノ便日ニ月ニ進歩シ、僅々四十餘日ニテ周遊ヲ爲スコトヲ得ルハ、亦驚クベキ人

事ノ發達ニアラズヤ。

第二十八課 忍耐

オーデニボンといひは、米國の古き博物學者なり。此人は特に鳥類を研究せし人にて、自ら銃を携へて山野に獵し、獲たる鳥をば、悉く寫生して、これを秘藏せり。かくてや、十五年の長き間に得たる鳥の寫生畫、凡そ千餘枚に上り、頃旅行すべき用事の出來せしかば、かの秘藏畫を、大なる箱に入れ、これを友人に託し、置きて出立

せり。

友人は預かりたる箱を己が倉庫に藏めたるが、オーデ・ボン<sup>デュ</sup>は二三週間の後歸り來てこれを檢め見しに、こはいかに鼠其中に巢ぐひて、千餘枚の寫生畫は爲めに破られ汚されて、一も全きものなかりき。

オーデ・ボンが悲みいかにぞや。これが爲め病氣にかゝり、久しく病床に呻吟して、生命も危きほどに至れり。されど、此熱心と忍耐との好き模範なる博物學者は、病全く癒はたる時、再び銃

を肩にして山野を跋渉し得たる鳥類をば、一々寫生し、畢生の力を盡して勉強せしかば、三年の間に、以前の如く千餘枚の寫生畫を彼の箱に満たすを得たりしとぞ。オーデ・ボンが如き熱心と忍耐こそ何事を成すにも有りたきものなれ。

第二十九課

應舉が臥猪并野馬の話

圓山應舉に臥猪の畫を乞ふ者あり。應舉いまだ嘗て野猪の臥したるを見ず。こゝろにこれをもふ。矢背に老婆あり、薪を負うてつねに舉が

家に來る。應舉婆に問ふ「爾野猪の臥したるを見たるか。婆云ふ「山中たまくこれを見る。舉云ふ「爾かさねてこれを見はやくあれみしらせよ。篤く賞すべし。婆諾す。一月ばかりありて、老婆が家のうしろなる竹篁中に野猪ありて臥す。婆これを見て大によろこび、京にはり行きて、舉にこれを告ぐ。舉が云く「爾まづかへれ、かならずしも驚かすべからず」といふて、俄頃に酒食を携へ、門人一兩輩を將て、矢背に至れば、野猪は猶竹篁中に臥したり。應舉すなはち筆を採りてこれを

うつし、婆に謝して、その夜家にかへり、其後これを清畫して、工拙既にどこのふ。時に舉が家に鞍馬より來る老翁あり。この翁めづらく來りぬ。舉こゝろに臥猪の事をれもふ。すなはち問ふて云ふ「汝野猪の臥したるを見たるか。翁云ふ「山中常にこれを見る。舉畫するところの臥猪をいめて云ふ「この畫如何。翁熟視することや、久しくして云く「この畫よくいへども、臥猪にあらず。是れ病猪なり」といふ。舉れどろきてそのゆゑを問ふ。翁云く「凡そ野猪の叢中に眠るや、毛髮憤

起四足屈蟠れのづからいきほひあり。僕山中にて病猪を見たることあり。實にこの畫の如し。舉はづめて曉りて、翁に臥猪の形容を問ふ。翁之を説くことはなほだ詳なり。是に於て舉さきの畫をすて、更に臥猪を圖す。工夫もつはら翁が口傳によれり。四五日ありて矢背の老婆來る。舉さきに見たり。野猪をとへば、婆云く「あやしむべし。彼の野猪その詰朝竹中に死たり。舉之を聞きていよく、翁が卓見を感じ、ふたゝびそのれとづれをまつ。一句ばかりを経て、翁又來りぬ。舉後

に圖するどころの畫幅を披きてこれを見せしむ。翁驚歎して云く「是れ眞の臥猪なり」と。舉よることびて厚く翁に謝す。その畫もつとも奇絶なり。今なほ京師某の家にあり。舉が畫に心をもちゐしこと斯の如し。又應舉わかゝりし時、野馬の草をはむところを圖せり。一老翁見て難けて云く「これ盲馬なり。舉云く「うのゆゑ甚麼。翁云く「夫れ馬の草をくらはんとするや、必ず先づその目を閉づ。これ草に目を傷らんことを厭へばなり。この馬叢中に鼻づらをいれながら、その兩眼なほ

見ひらきてあり、これ盲馬にあらずして何ぞや。舉ふかくその説を感ず。抑この二翁何人ぞ。野夫にも巧者ありとは、これらをやいふべき。

瀧澤馬琴…典亭漫筆

### 第三十課 締盟國

我が國ハ古來東洋ニ孤立シテ、支那、朝鮮及ビ和蘭ノ外ハ交際セズ。其他ノ國人ヲ視テハ總ベテ之ヲ野蠻ト爲シ、彼等ガ國內ニ入り、國民ト交ルコトハ嚴禁シテ許サバリキ。而ルニ今ヲ距ル

コト三十餘年前ヨリ、始メテ彼等ト交通シ、修好及ビ通商條約ヲ結ブニ至レリ。

本邦ト初メテ和親條約ヲ結ビタルハ、亞米利加合衆國ナリ。此條約ハ、安政元年三月、神奈川ニ於テ調印セリ。米國ニ次デ條約ヲ結ビタルハ、英吉利、露西亞、和蘭、佛蘭西、獨逸等ナリ。英、米、佛、獨、蘭ノ五國ハ、通商、政治、法律、兵事、文學、教育ニ於テ、各本邦ノ爲ニ進歩ヲ資ケ、利益ヲ與ヘタルコト少カラズ。

露西亞ハ世界ノ大國ニシテ、列國ノ間ニ勢力

高等讀本 第六卷 第六十一頁  
ヲ有シ殊ニ東洋ニ於テハ本邦ト隣國ノ好アリ。  
又支那及ビ朝鮮ト本邦ニ於ケル關係ハ決シテ  
他ノ外國ノ比ニアラズ。古來既ニ久シク相往來  
セシ舊交ハ深ク彼我人民ノ記憶ニ存スル所ナ  
リ。其他ノ條約國ト本邦トノ交渉ハ未ダ大ニ進  
歩セズ。然レドモ將來ニ於テハ漸次ニ頻繁ナル  
ベシ。

條約國ニハ本邦ヨリ公使若クハ領事ヲ派遣  
シテ各地ニ公館ヲ開ケリ。公使館ハ各國ノ首府  
ニ設ケ領事官ハ貿易隆盛ノ地ニ置ケリ。條約國

モ亦各本邦ニ向テ公使領事等ヲ送り公使館領  
事館ヲ東京、橫濱、大阪、神戸、長崎等ニ開設セリ。

斯ノ如ク各國互ニ外交ヲ重シジ條約ヲ結ビ  
テ相交通スルハ何ゾヤ。彼我共ニ之ニ依リテ國  
利民福ヲ計ランガ爲メナリ。列國ノ間ニハ外ニ  
仁義ヲ飾リテ内ニ吞噬ノ政畧ヲ懷クモノアリ。  
故ニ本邦ハ之ニ對シテ常ニ警戒ヲ加ヘ武ヲ鍊  
リ兵ヲ養ハザル可カラズト雖モ專ラ平和ノ交  
際ヲ旨トシ務メテ戰爭ノ禍害ヲ避ケザル可カ  
ラズ。平和ノ交際ヨリ生ズベキ内外ノ利益ハ最

高等讀本  
 第二卷  
 モ廣大ニシテ戦争ノ爲ニ起ルベキ禍害ハ極メ  
 テ慘烈ナレバナリ。  
 平和ノ交際ハ信義ヲ重ンジ恭敬ヲ盡スニ在  
 リ。故ニ我が國民ノ外國人ニ對スルニハ決シテ  
 詐偽無禮等ノ行アル可カラズ。

高等讀本卷之四 終

版權所有

高等讀本 全八冊

卷一	明治二十六年二月二十五日發行
卷二	明治二十六年六月二十五日發行
卷三	明治二十六年六月二十五日發行
卷四	明治二十六年六月二十五日發行
卷五	明治二十六年六月二十五日發行
卷六	明治二十六年六月二十五日發行
卷七	明治二十六年六月二十五日發行
卷八	明治二十六年六月二十五日發行
同治	明治二十六年六月二十五日發行

卷一	金十八錢
卷二	金十八錢
卷三	金十八錢
卷四	金十八錢
卷五	金十八錢
卷六	金十八錢
卷七	金十八錢
卷八	金十八錢

著者 山縣悌三郎  
 東京府下北區島村上町三十九番地  
 發行所 小林義則  
 東京市日本橋區本町四丁目十六番地  
 發售 文學社  
 東京市日本橋區本町四丁目十六番地  
 印刷所 文學社工場  
 東京市神田區錦町一丁目一番地

明治20  
46